

資料紹介

(伝) 西予市宇和町坂戸古墳群出土金属製品

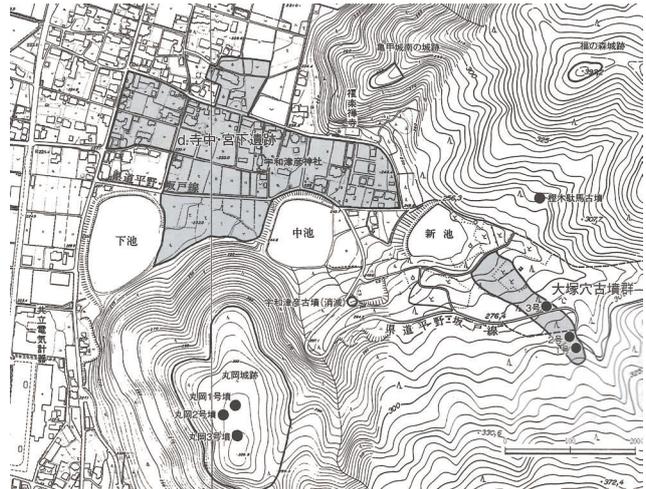
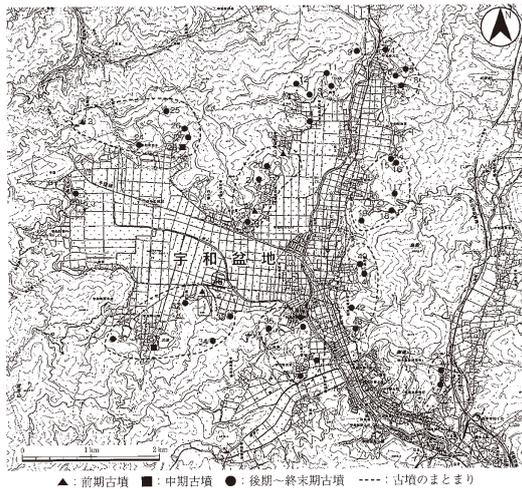
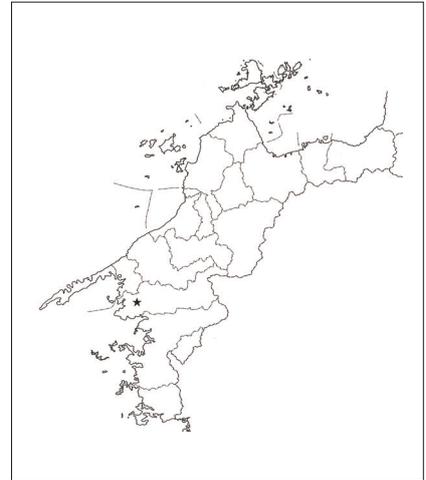
石貫弘泰[※]・富田尚夫^{※※}

はじめに

本稿は、平成13(2001)年9月に個人の方から当館に寄託され、令和6(2024)年5月に寄贈に変更された(伝)西予市宇和町坂戸古墳群出土金属製品を紹介するものである。出土した古墳の詳細は不詳であるが、鍬鋤先⁽¹⁾、鉄斧、鉄鎌、ヤリ、鉄鏃、耳環がある。当館では、資料を受託後、保存処理を実施し、保管していたが、石貫弘泰氏((公財)愛媛県埋蔵文化財センター)が、県内出土の農工具を集成する中で、当資料に注目し、南予地域では数少ない古墳時代の鉄製品であることから、今回、資料紹介を行うものである。

資料の来歴は、個人の方が今から約50年前に大洲市内の骨董商にて、地元から資料を散逸することを避けるため、購入されたとのことである。その後、先述のように、当館に寄託後、寄贈されたものである⁽²⁾。

西予市宇和町坂戸地区は、宇和盆地の北西部に位置し、周辺には巨石を用いた榎木駄場古墳(富田1998)⁽³⁾や大量の須恵器が出土した大塚穴古墳群(門多1973)、明治時代に須恵器が出土した坂戸京塚古墳(東京国立博物館1998)など後期から終末期にかけての古墳が集中して築造されている地域の一つである。今回紹介する資料は、出土した古墳は不詳であるが、鉄製農具、武器、装身具が残存し、古墳の副葬品のセットの一部として位置付けることが可能な資料群である。(富田)



- 1小森古墳 2笠置峠古墳 3ムカイ山古墳 4瀬戸古墳群 5大江1・2号墳
- 6城山1・2号墳 7垣内古墳 8日之地古墳 9大江駄馬古墳群 10松ノ本古墳
- 11水ノ本古墳 12妙法寺裏山古墳 13田苗里古墳 14鬼塚古墳 15一の谷古墳
- 16二の谷古墳 17榎木駄馬古墳 18大塚穴古墳群 19丸岡古墳群 20北ヶ市古墳群
- 21寺谷古墳 22長作森古墳 23権介山古墳 24安養寺裏山古墳群 25東大谷古墳
- 26河内奥ナルタキ古墳群 27勝光寺裏山古墳 28岩木赤坂古墳 29一宮神社古墳
- 30伊勢山古墳 31長尾古墳 32大森古墳 33大林古墳 34栗尻古墳群 35谷が内古墳
- 36赤坂古墳 37若宮鼻古墳 38城の端古墳 39片山古墳 40大恵寺裏山古墳
- 41反花古墳 42伊勢山大塚1号墳 43伊勢山大塚2号墳 44明石寺古墳群 45明石古墳
- 46坪栗遺跡 47国木遺跡

図1 西予市坂戸古墳群の位置と周辺の古墳群

2. 保存処理

これらの資料は、当館受託後、考古収蔵庫にて保管し、耳環以外の資料は、平成28(2016)年に当館保存処理室1にて、下記の方法にて保存処理を実施した。

処理前の調査

処理前の状況を記録するため、写真撮影を行った。

洗浄・脱塩

水酸化リチウム/アルコール溶液に浸けこんで、脱塩処理し、アルコール脱水と強制乾燥を実施した。

樹脂含浸

遺物強化と防錆のため、非水溶性アクリルエマルジョン系合成樹脂(パラロイドNAD-10)による樹脂含浸を1回実施した。



図2 (伝) 坂戸古墳群金属製品処理前写真(縮尺不同)

接合

接合にはシアノアクリレート系樹脂とエポキシ系樹脂を使用した。

処理後の調査

処理後の状況を記録するため、写真撮影を行った。(富田)



図3 (伝) 坂戸古墳群出土金属製品X線写真 (縮尺不同)

3. 資料の概要

今回、(伝) 坂戸古墳群出土の資料として図化した鉄製品はヤリ1点、鉄鏃6点、U字形鏃鋤先1点、鉄鎌1点、鉄斧1点の計10点、青銅製品は耳環1点である(図3、図4)。

(1) 武器

ヤリ(図4-1、図5-1) 残存長が383.69mmで、刃部長は317.95mmである。目釘孔は2か所にみられる。基部には木質が残存しており、糸巻きの痕跡が一部に確認できる(図6)。この木質部の形状と糸巻きの痕跡から、ヤリと判断した。豊島直博氏の分類では、同資料は糸巻頂点型となる(豊島2010)。

突出部の斜辺は丸みを帯びている。木質部分の残存状況は良くないため、木質部材の接合部の痕跡などは把握できなかった。愛媛県内では、(伝)坂戸古墳群出土事例と類似する鉄製品は、高橋仏師1号墳(図9-1)、別名一本松古墳(図9-2)で1点ずつ出土している。これらの鉄製品は各報告書では鉄剣として報告がなされているが、(伝)坂戸古墳群出土資料と同様の根拠から、ヤリと判断できる。豊島分類では高橋仏師1号墳出土のヤリが糸巻底辺型、別名一本松古墳のヤリが糸巻頂点型とされる。

鉄鎌(図4-2~7、図5-2~7) 鉄鎌は長頸鎌5点(図4-2~6)、短頸平根系鎌1点(図4-7)が確認できる。長頸鎌の鎌身部形状は、図4-2と図4-4が片刃形で、図4-3・図4-5・図4-6が長三角形である。関の形状は、図4-4以外はすべて角関である。図4-3は頸部が34.64mmで、他の長頸鎌と比較すると、2分の1以下の長さである。短頸平根系鎌の鎌身部形状は三角形で、側面は腸袂にむかって直線的にのびる。腸袂内側は曲線的で、外側にふくらむ。頸部関はやや台形である。

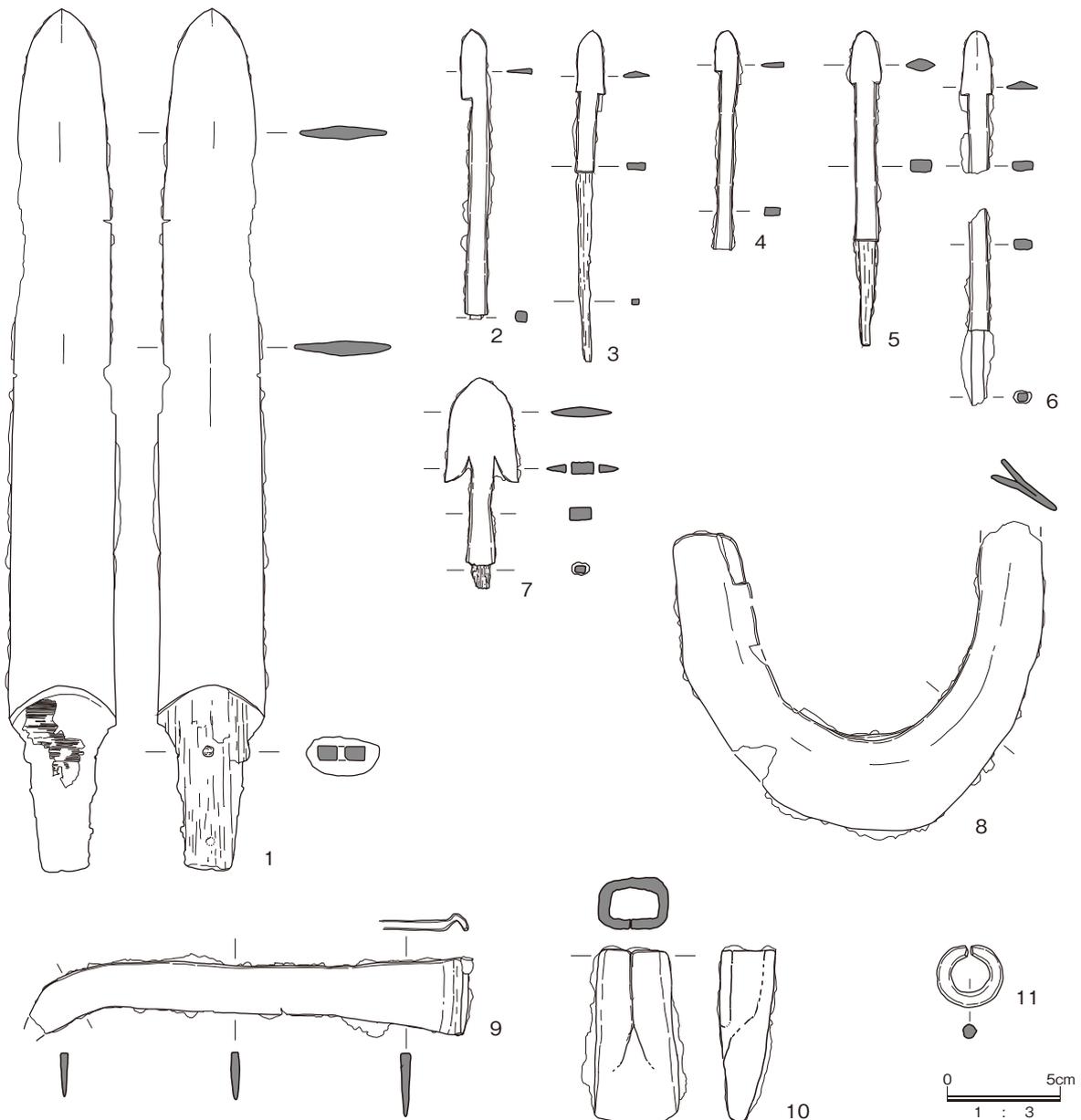


図4 (伝) 坂戸古墳群出土金属製品実測図



図5 (伝) 坂戸古墳群出土金属製品

(2) 農工具

鍬鋤先 (図4-8、図5-8) 鍬鋤先はU字形鍬鋤先で、全長は137.16mmである。刃部長が43.33mm、耳部幅は28.40mmで、石貫がおこなったU字形鍬鋤先の分析をもとにすると、これらの長さの違いの比率が1.53となる。いっぽう、耳部厚と刃部厚の厚みの違いをみると、耳部厚が3.86mm、刃部厚は5.78mmとなり、耳部厚より刃部厚が厚い。以上の点から、(伝) 坂戸古墳群出土のU字形鍬鋤先は、石貫分類ではⅡ類となる (石貫2021、図7)。また、製作方法は、断面の形状から鉄素材の長辺側を折り曲げて製作されたことがわかる (図6)。

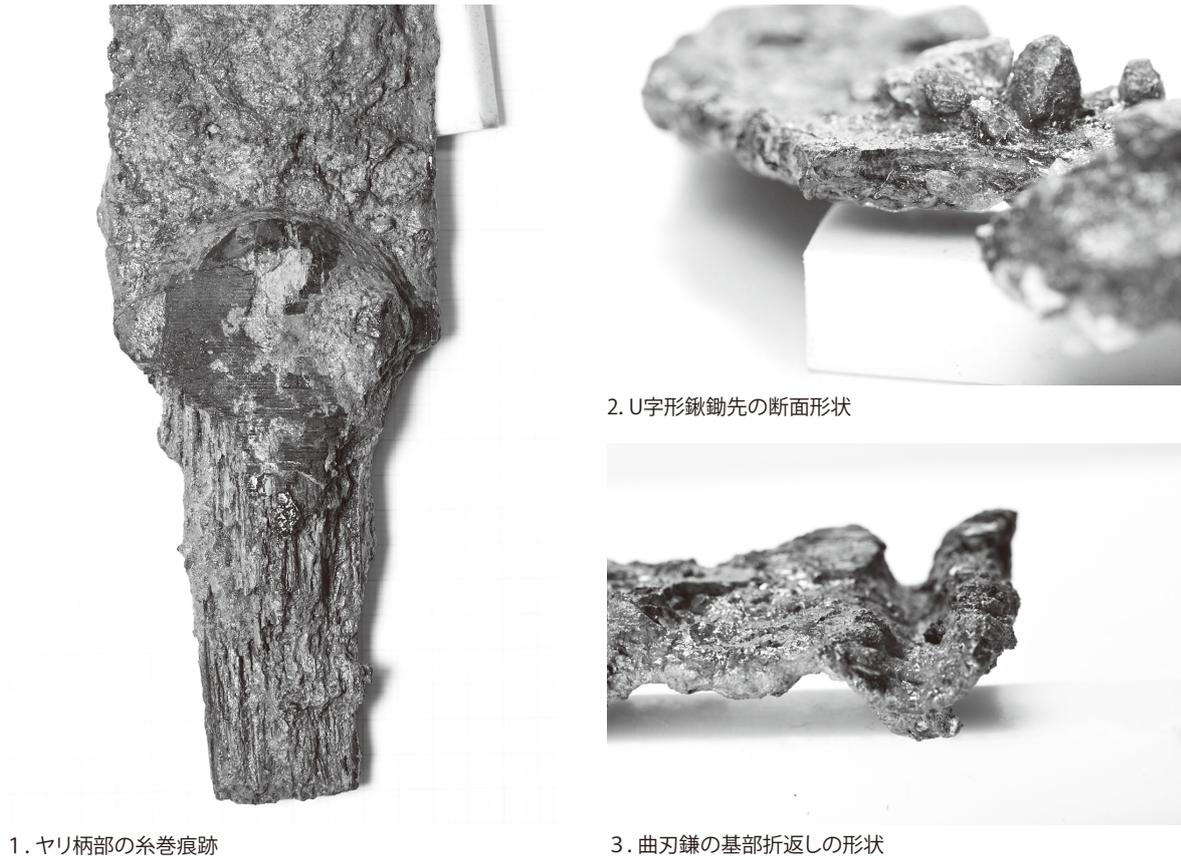


図6 ヤリ・U字形鋤鋤先・曲刃鎌の細部の状態

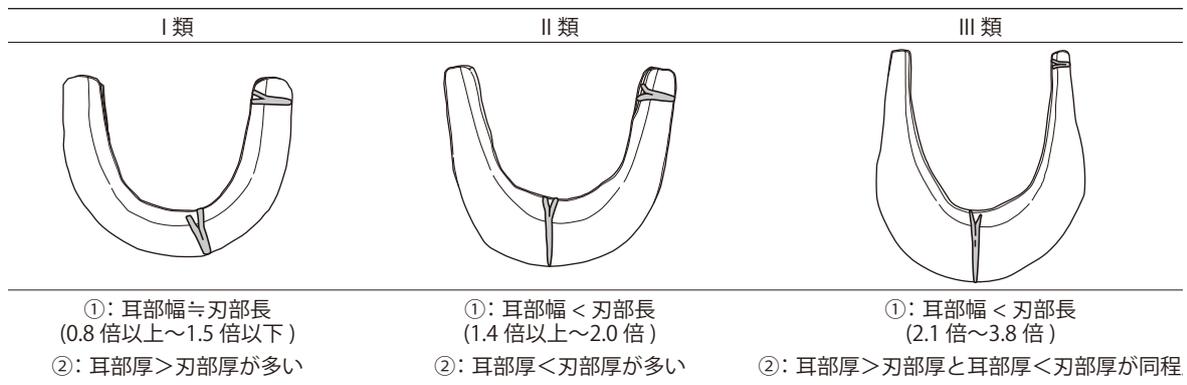


図7 U字形鋤鋤先の分類

鉄鎌 (図4-9、図5-9) 鉄鎌は全長が193.79mmで中型鎌である。着柄角度は90°で、農業用刈鎌といえる(古瀬1991)。基部の折り曲げ方法から甲技法曲刃鎌である。基部の形状は石貫分類の甲Ⅲ類で、この類型は県内初の事例である(石貫2022)。刃先部が欠損しているため正確には不明だが、残存部からの刃先の長さを復元すると、基部幅と刃先長の比率が1:0.4よりも小さくなることから、石貫分類では甲Ⅲb類となる(図8)。基部の特徴としては、基部折り返しがU字状に曲げられている点である。愛媛県内の鉄鎌では、土壇原V遺跡第5号墳周溝(4号墳主体部)から出土した鉄鎌(図11-4)にその類例が確認できる。土壇原鉄鎌も(伝)坂戸古墳群鉄鎌と同じく甲類である。「工人のクセ」的な類似なのかは判断できないが、愛媛県内ではこの基部折り返しをもつ資料は2例のみである。

鉄斧 (図4-10、図5-10) 全長が77.49mmで、刃部長は27.63mmである。袋部の形状は方形である。袋部の先端は密接している。また、断面の形状をみると、袋部が刃部から傾斜しながら形成されていることから、一つの鉄素材を鍛延することで製作されたと理解できる。

基部の折り曲げ方法	曲刃鎌甲技法			曲刃鎌乙技法		
基部の形状	甲Ⅰ類	甲Ⅱ類	甲Ⅲ類	乙Ⅰ類	乙Ⅱ類	乙Ⅲ類
			 ※伝坂戸古墳群			
基部幅と刃先長の比率	甲Ⅰa類		甲Ⅰa類		甲Ⅰa類	
	甲Ⅰb類		甲Ⅰb類		甲Ⅰb類	
	甲Ⅱa類		甲Ⅱa類		甲Ⅱa類	
甲Ⅱb類		甲Ⅱb類		甲Ⅱb類		
甲Ⅲa類		甲Ⅲa類		甲Ⅲa類		
甲Ⅲb類		甲Ⅲb類		甲Ⅲb類		

図8 形態的属性による曲刃鎌の分類

(3) 装身具

耳環 (図4-11、図5-11) 耳環高が27.63mm、耳環幅は29.24mmである。残存状況が良くないが、銅製の芯材に金板または銀板による中間材が巻かれていたのではないかと推定される。金宇大氏による分類のB4類に相当する (金2023)。(石貫)

4. 資料の評価

(1) (伝) 坂戸古墳群出土金属器の時期的な評価 豊島氏によると糸巻底辺型のヤリは弥生時代終末期の墳丘墓～古墳時代前期後半の会津大塚山古墳や伯耆国分寺古墳にもみられるとのことで、一定の幅をもって存続するが、古墳時代については古墳時代前期までで収まる。糸巻頂点型は最古相の前方後円墳～前期末であり、これも古墳時代前期で収まる (豊島2010)。愛媛県内の事例⁽⁴⁾をみると、糸巻底辺型の高橋仏師1号墳の時期は古墳時代前期初頭であり、豊島氏の編年と整合する。また、糸巻頂点型の別名一本松古墳の時期は古墳時代前期後葉とされ、糸巻底辺型→糸巻頂点型という流れとも整合する。(伝) 坂戸古墳群出土資料の時期は糸巻底辺型であることから、豊島氏の編年を根拠に古墳時代前期初頭～古墳時代前期末としておきたい。

鉄鏃については、水野氏の分類にしたがう。長頸鏃は水野編年の後期第1段階の所産と考えられ、短頸平根系鏃は後期第1段階～第2段階と考えられる (水野2023、図12)。水野編年の後期第1段階はMT15～TK10段階で、後期第2段階はTK43段階である。したがって、長頸鏃については古墳時代後期前葉～古墳時代後期中葉、短頸平根系鏃については古墳時代後期前葉～古墳時代後期後葉に位置づけておきたい。

愛媛県内におけるU字形鍬鋤先Ⅱ類の出現は5世紀中葉～後半と考えられ、5世紀末の空白期間を経て、7世紀中葉段階までみられる。(伝) 坂戸古墳群出土資料は平面形状が法華寺裏山古墳 (図10-1)

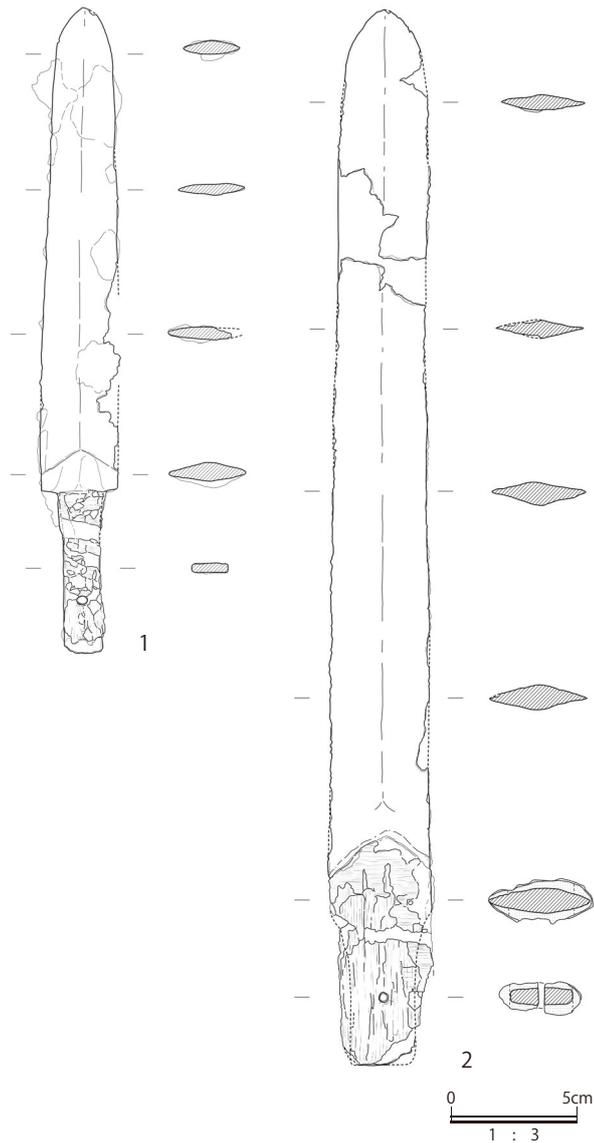
と鳥越1号墳(図10-2)の出土事例に類似しており、これらの古墳の初葬は、法華寺裏山古墳は6世紀前葉で、鳥越1号墳は6世紀中葉である。したがって、(伝)坂戸古墳群の資料は6世紀前葉から6世紀中葉ごろに位置づけておきたい⁽⁵⁾。

愛媛県内の甲技法曲刃鎌は5世紀中葉の猪の窟1号墳、5世紀後葉の出作遺跡SX01、東山古墳群SK06、5世紀代の土壇原V遺跡第5号墳周溝(4号墳主体部)、6世紀前葉の鹿の子5号墳、初葬が6世紀前葉の法華寺裏山古墳と高橋仏師1号墳第1主体の7例がみられる(図11)。(伝)坂戸古墳群の曲刃鎌と基部折り返し部の形状が類似する土壇原V遺跡第5号墳周溝(4号墳主体部)の曲刃鎌は5世紀代の資料である点と、愛媛県内での曲刃鎌甲技法の出現は5世紀中葉ごろと考えられる点から、(伝)坂戸古墳群の甲技法曲刃鎌の時期は5世紀中葉～6世紀前葉ごろに位置づけておきたい。

(伝)坂戸古墳群出土の耳環は、金宇大氏による分類にしたがうと、陶邑編年のTK217型式に併行する。(石貫)

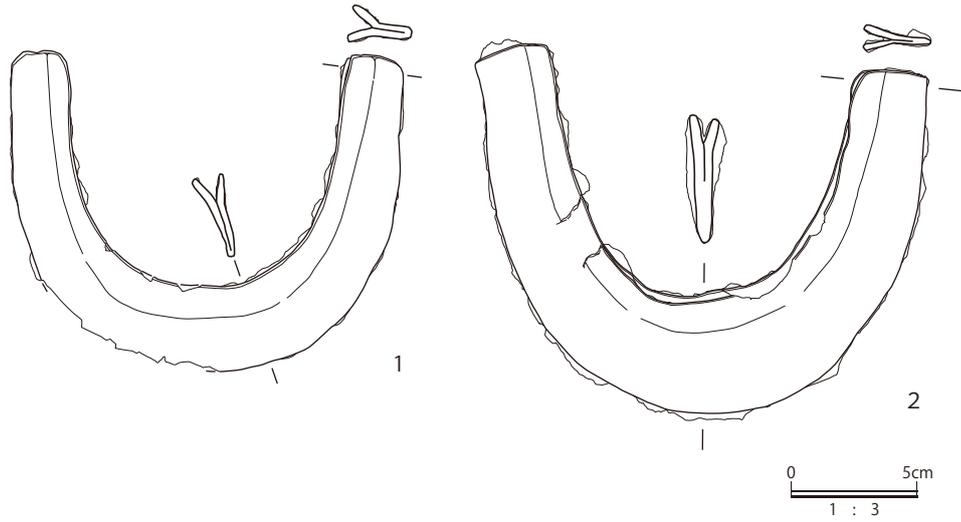
(2) 時期的な評価からみた坂戸古墳群出土金属器

(伝)坂戸古墳群出土を時期的な評価からみた場合、各金属器の時期は、①：古墳時代前期初頭～古墳時代前期末に位置づけられるヤリ、②：古墳時代中期後半～古墳時代後期前葉に位置づけられる曲刃鎌、③：古墳時代後期前葉～古墳時代後期中葉に位置づけられる長頸鎌とU字形鋤鋤先、④：古墳時代後期前葉～古墳時代後期後葉に位置づけられる短頸平根系鎌、⑤：古墳時代終末期に位置づけられる耳環の5つに分けられる(図13)。1基の古墳または古墳群からの一括資料としてみると、③と④については古墳時代後期前葉～古墳時代後期中葉の範疇で重なることから一括資料である可能性が考えられる。やや時期が下るが、追葬などを想定すると、一括資料としてとらえることは可能である。ただし、①については、他の遺物との時期的なへだたりがあり、一括資料としての可能性は低いと考えられる。(石貫・富田)



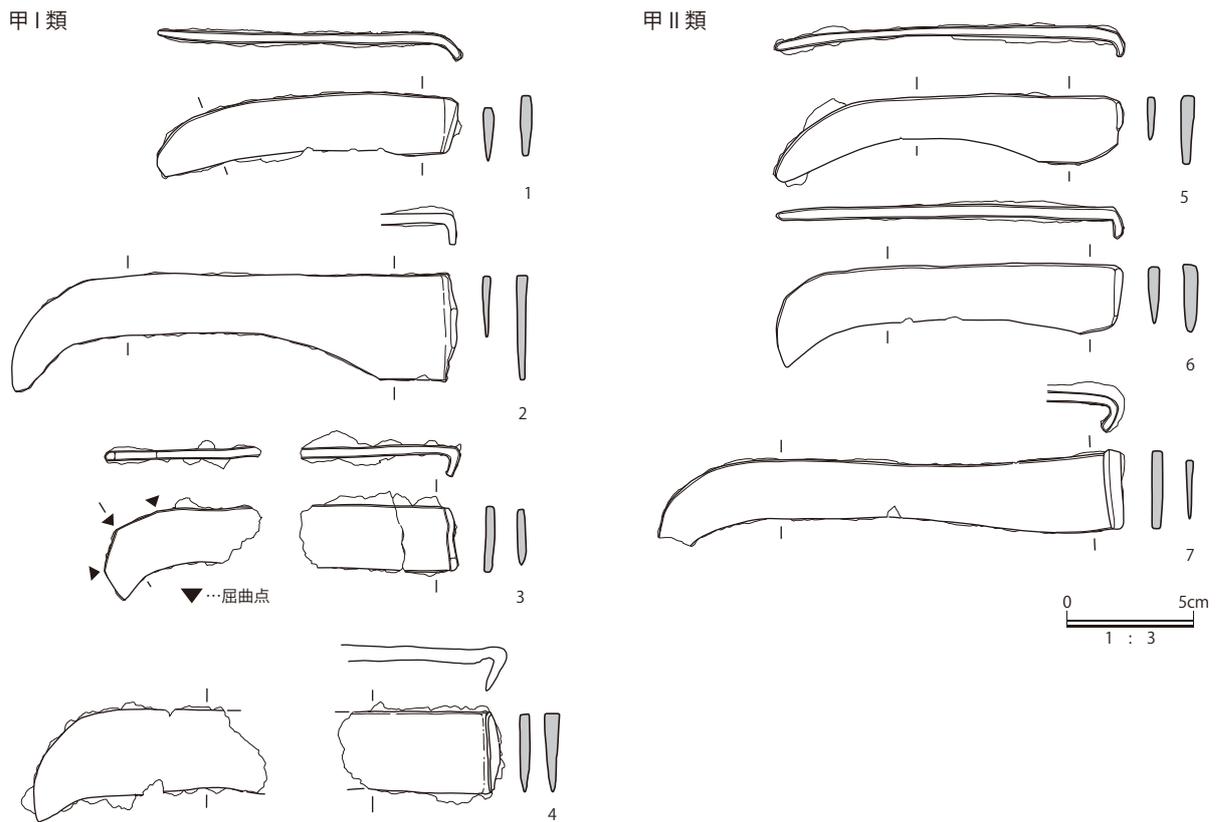
1:高橋仏師1号墳(糸巻底辺型)、2:別名一本松古墳(糸巻頂点型)

図9 愛媛県内のヤリの類例



1. 法華寺裏山古墳、2. 鳥越1号墳

図10 愛媛県内のU字形鋤鋤先Ⅱ類の類例



1. 猪の窪1号墳、2. 東山古墳群SK06、3. 鹿の子5号墳第1主体、4. 土壇原V遺跡5号墳周溝(4号墳主体部)、5. 出作遺跡SX01、6. 法華寺裏山古墳、7. 高橋仏師1号墳第1主体

図11 愛媛県内の甲技法曲刃鎌の類例

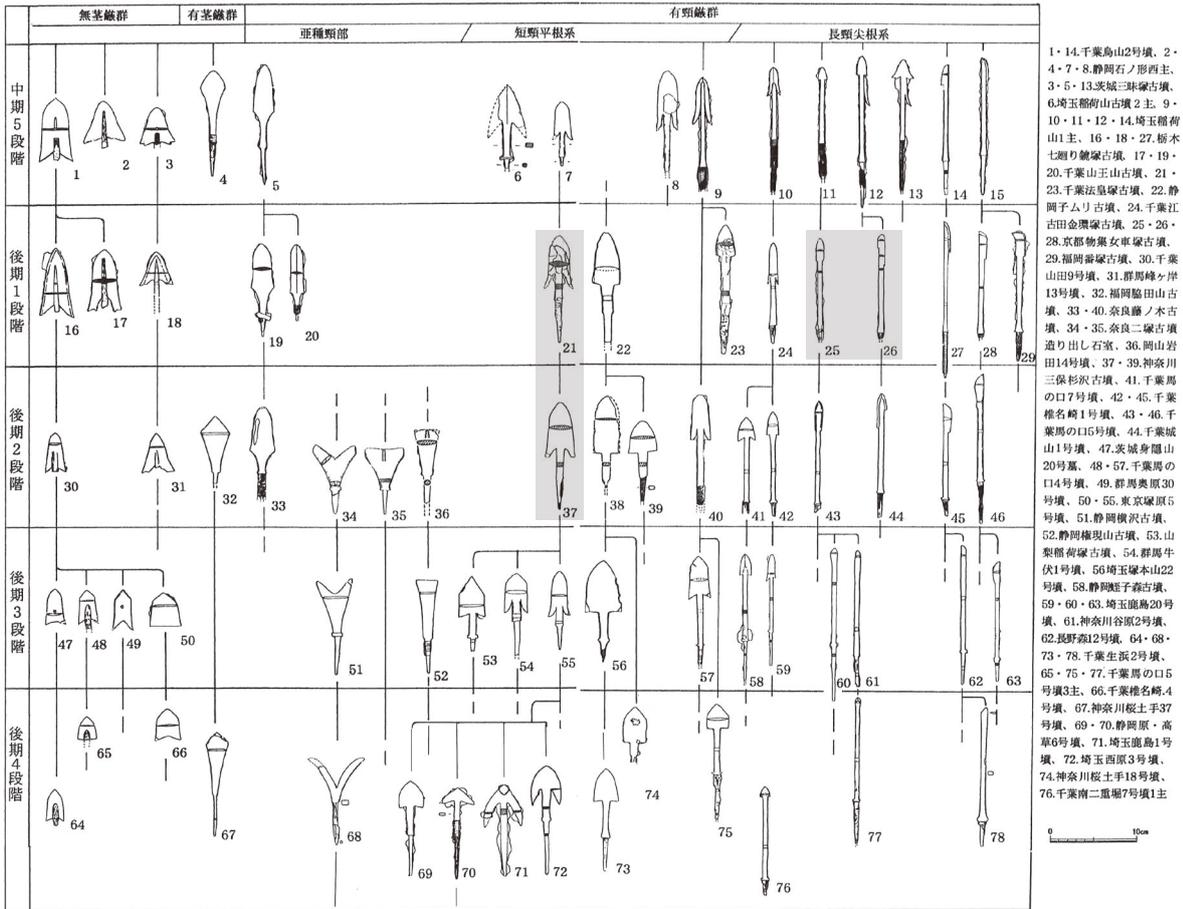


図12 水野氏による古墳時代後期鉄鏃の編年 (水野2023を一部改変して使用)

5. まとめ

今回紹介した資料は、一括で寄託後寄贈された資料であるが、3章・4章で分析した結果、武器ではヤリが古墳時代前期、

鉄鏃が古墳時代後期、農工具では、鏃鋤先が古墳時代後期、鎌が古墳時代中期後半～後期前半、装身具の耳環が古墳時代終末期という時期比定が可能である。これらの資料が骨董商を通じて収集されたことから、同じ宇和町内で出土したものが混在している可能性は否定することはできない。

これまで紹介されている (伝) 坂戸古墳群出土遺物は、古墳時代後期～終末期のものであり、前期に比定されるヤリは、一括資料として認定することはできない。近年、西予市宇和町では、前期古墳の発掘調査が進められており、笠置峠古墳 (村上編2017)、小森古墳 (西予市教育委員会2020)、ムカイ山古墳 (兒玉2017) の3基の前方後円墳が確認されている。今回紹介したヤリは出土した古墳は明確ではないが、当地域の前期古墳から出土した可能性が高いことを指摘した。

また、鉄鏃・農工具・耳環も古墳時代後期前半から終末期までのものが見られ、これまで確認されている坂戸古墳群の出土遺物の時期と一致する。そのため、同一古墳から出土した可能性は低いが、同古墳群から出土した可能性は高いと考える。

坂戸古墳群には、40数基の古墳が存在したというこれまでの調査報告 (門多1973) もあり、複数の古墳から出土したものが骨董商に持ち込まれた可能性が高いと考えられる。坂戸古墳群には、幾つかの古墳群・古墳が所在したと考えられている (西予市教育委員会2012)。中でも大塚穴古墳群は、「昭和30年

遺物名	時期別グループ	古墳時代							
		前期前半	前期後半	中期前半	中期後半	後期前半	後期中葉	後期後葉	終末期
ヤリ	①	■							
鉄鏃	②				■	■	■		
長頸鏃	③					■	■	■	
U字形鏃鋤先								■	■
短頸平根系鏃	④					■	■	■	
耳環	⑤								■

図13 (伝) 坂戸古墳群出土金属器の所属時期

代に開墾され、その際に破壊されたと考えられる。」(西予市教育委員会2012) 同古墳群出土須恵器を用いて、当地域の須恵器の編年を作成した越智淳平氏(越智2009)によると、大塚穴古墳群出土須恵器は、氏のⅠ期中葉～Ⅲ期に比定されており、6世紀前半～7世紀前半に位置付けることができる。それ故、鉄鎌・農工具・耳環は、周辺の大塚穴古墳群出土資料の可能性もあることも付記しておきたい。また、周辺には、京塚古墳が明治28(1895)年に発掘され、須恵器鉢、高坏、脚付長頸壺、銀環、石が東京国立博物館に所蔵されている(東京国立博物館1998)。これらの須恵器は、7世紀後半に位置付けられる。

以上のように、本稿で紹介した寄贈資料は、当地域にて一括で出土した可能性があるものの、ヤリは他の古墳出土遺物であることを明確にした。これらの資料が当地域の古墳文化の研究に少しでも寄与できれば幸いである。(富田)

※(公財)愛媛県埋蔵文化財センター 専門調査員 ※※愛媛県歴史文化博物館 専門学芸員・担当係長

【謝辞】

本稿をなすにあたり、下記の諸氏、諸機関にお世話になりました。記して深謝申し上げます。(五十音順・敬称略)
青木聡志、岩村孝平、梅木謙一、小野隼弥、亀井英希、小玉亜希子、兒玉洋志、島崎達也、田村澄晴、持永壮志朗、山本健一、吉岡和哉、渡部浩史、渡邊芳貴
今治市教育委員会、伊予市教育委員会、愛媛県教育委員会、(公財)愛媛県埋蔵文化財センター、松山市考古館

【註】

- (1) U字形鉄鋤先の名称は、U字形刃先などの別の名称もあるが、今回はU字形鉄鋤先または鉄鋤先という名称を使用する。
- (2) 寄贈者からの聞き取りによると、購入した骨董商は大洲市内で、現在は存在しないとのことである。出土した古墳は特定できないが、今回は(伝)坂戸古墳群出土遺物として紹介するものである。
- (3) 近年、榎木駄場古墳の三次元計測データが次のURLで公開されている<https://skfb.ly/psTLX>。(2025年1月23日閲覧) また、大久保徹也氏が、香川県三豊平野における角塚古墳の石室の編年を行い(大久保2009)、その後、佐伯麗氏が角塚型古墳の石室の編年を検討し、本古墳を第2段階に位置付けている(佐伯2012)。清家章氏は、7世紀において本墳を含めた角塚型古墳の石室とその分布より、瀬戸内の交通路と新興勢力の台頭について論じている(清家2012)。このように、本墳は7世紀の四国における政治的関係を検討する上で重要な位置を占める古墳であるといえる。
- (4) 愛媛県内の古墳時代前期に所属するヤリと考えられる鉄製品は、今治市の別名一本松古墳と高橋仏師1号墳のほかには、西予市の笠置峠古墳出土のものがある。豊島氏によると、笠置峠古墳出土のヤリは直線型A類に分類される。豊島氏はヤリの変遷を、糸巻底刃型→糸巻頂点型→直線型A類→直線型B類と推定している。また、直線型A類と直線型B類はC段階の舶載三角縁神獣鏡の出現とほぼ重なるとも述べている。
- (5) ここでは、U字形鉄鋤先の年代観を初葬段階にもとに位置づけているが、法華寺裏山古墳はMT15型式併行期～TK43型式併行期、鳥越1号墳はTK10型式併行期～TK209型式併行期と時間幅をもつ。

【参考文献】

- 石貫弘泰2021「愛媛県内出土のU字形鉄鋤先－製作方法の検討をもとに－」『紀要愛媛』17(公財)愛媛県埋蔵文化財センター pp.1-24
- 石貫弘泰2022「愛媛県内における曲刃鎌の生産とその展開」『紀要愛媛』18(公財)愛媛県埋蔵文化財センター pp.39-82
- 大久保徹也2009「大野原古墳群の基礎的検討」『考古学と地域文化』一山典還暦記論集刊行会 pp. 501-510
- 越智淳平2009「宇和地域における古墳時代中期～平安時代の須恵器」『宇和盆地の古代文化研究Ⅰ』西予市教育委員会 pp. 91-110
- 門多正志1973『調査報告書 宇和の古墳』宇和町教育委員会
- 河野正訓2014『古墳時代の農具研究－鉄製刃先の基礎的検討をもとに－』雄山閣

金字大2023「古墳時代後期における垂飾付耳飾および耳環の様相」『後期古墳研究の現状と課題I - 交差編年の手がかり -』中四国前方後円墳研究会 第26回研究会発表要旨集 pp.115-126

兒玉洋志2017「宇和盆地で新たに発見された前期前方後円墳 - ムカイ山古墳」『西南四国(宇和)における古期前方後円墳の葬送儀礼(飲食儀礼)の復元』西予市教育委員会 pp. 41 - 48

佐伯 麗2012「角塚型石室の形態と変遷」『古墳時代終末期の大型横穴式石室に見る瀬戸内と周辺の政治的関係』高知大学人文学部考古学研究室 pp.21-45

清家 章2012「総括」『古墳時代終末期の大型横穴式石室に見る瀬戸内と周辺の政治的関係』高知大学人文学部考古学研究室 pp.81-89

西予市教育委員会2012『西予市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』

西予市教育委員会2020『西予市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅴ』

東京国立博物館1998『東京国立博物館所蔵須恵器集成Ⅲ(西日本編)』便利堂

富田尚夫1998「南予の横穴式石室」『遺跡』第36号 遺跡発行会 pp. 147 - 158

豊島直博2010「古墳時代前期におけるヤリの編年と流通」『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房 pp.115-13

古瀬清秀1991「農具」『古墳時代の研究』8 古墳Ⅱ 副葬品 雄山閣 pp.71-91

水野敏典2023「古墳時代後期の鉄鏃編年」『後期古墳研究の現状と課題I - 交差編年の手がかり -』中四国前方後円墳研究会第26回研究会発表要旨集 pp.147-158

村上恭通編2011『宇和盆地の古墳文化研究Ⅰ-河内奥ナルタキ1号墳発掘調査報告-』愛媛県西予市教育委員会・愛媛大学法文学部考古学研究室

山内英樹2008『別名一本松古墳・矢田長尾1号墳・矢田長尾Ⅰ遺跡・高橋佐夜ノ谷遺跡・高橋向谷2号墳・高橋仏師1～4号墳』埋蔵文化財発掘調査報告第146集 愛媛県埋蔵文化財センター

【挿図出典】

(図3以外の実測図については、石貫実測の場合は所蔵・保管機関を記述、転載の場合は引用文献を記述。)

図1-2：西予市教委2020、図1-3：西予市教委2012、図2：富田撮影、図3：当館撮影、図4、図5：石貫作成、図7：石貫2021、図8：石貫2022を一部改変して使用、図9：山内英樹2008、図12：水野2023を一部改変して使用、図10：1・2(石貫：愛媛県教育委員会)、図11：1(石貫：伊予市教育委員会)、2(石貫：松山市考古館)、3・6・7(石貫：愛媛県教育委員会)、4(石貫：当館)、5(石貫：松前町教育委員会)、図12：石貫作成、図14-1：岩村孝平氏作成データを青木聡志氏が加工、図14-2：愛媛考古学協会作成。

【付載】榎木駄場古墳の横穴式石室 計測図

表1 (伝) 坂戸古墳群出土金属製品観察表

ヤリ														
番号	分類	全長	刃部長	茎部長	刃部最大幅	茎部最大幅	目釘穴数							
1	糸巻底辺型	383.69	317.95	65.74	47.41	-	2							
鉄鏃														
番号	分類	全長	刃部長	頸部長	茎部長	刃部最大幅	茎部最大幅							
2	長頸尖根系	128.66	30.37	95.92	2.37	11.14	4.85							
3	長頸尖根系	147.16	28.44	34.64	84.08	13.07	7.34							
4	長頸尖根系	97.39	17.97	79.42	-	10.01	-							
5	長頸尖根系	139.89	23.45	70.08	46.36	13.75	7.28							
6	長頸尖根系	-	28.45	-	33.69	13.48	5.73							
7	短頸平根系	93.44	46.18	-	10.24	32.34	8.39							
U字形鍬鋤先														
番号	類型	全長	耳部長	刃部長	耳部幅	刃部長/耳部幅	耳部厚		刃部厚					
							最大厚	Y字部厚	先端厚	計測部最大厚	Y字部厚	先端厚		
8	Ⅱ類	137.16	93.83	43.33	28.40	1.53	-	a	b	3.86	5.78	a	b	2.42
鉄鏃														
番号	分類	全長	刃部幅	背最大厚	折返し方法	着柄角度	屈曲点	基部幅	刃先長					
9	甲Ⅲb類	193.79	21.12	4.32	甲技法	90°	0	34.40	-					
鉄斧														
番号	分類	全長	刃部長	最大幅	最大厚	袋部最大厚	袋部先端厚	耳環						
								番号	耳環高	耳環幅	断面高	断面幅		
10		77.49	27.63	37.33	17.92	16.44	4.28	11	27.63	29.24	6.20	6.06		

本稿作成にあたり、岩村孝平氏より計測された宇和町坂戸地区に所在する榎木駄場古墳の横穴式石室のデータを提供していただいた。富田1998に掲載した愛媛考古学協会の実測図と原稿を転載し、当地域の古墳の基礎資料として掲載した。(富田)

① 概況

丘陵傾斜地に立地し、標高は約280mで坂戸の集落からの比高差は約54mを計る。古墳からは直接、集落・盆地部を眺望することはできない。周辺には同様の円墳一基がかつて存在していたことが長山源雄によって記録されている。墳丘は傾斜地の斜面を削り出して、盛り土を行い形成している。現状では直径11.9m、高さ約4.5mを計る円墳で、墳丘の残存状況は良好である。

② 石室

両袖式の横穴式石室で全長7.5m、幅は奥壁部で1.77m、高さは奥壁部で1.63mを計る。石室は羨道・玄室からなり、羨道は長さ3.2m、幅1.4～1.5m、高さ1.4～1.5mを計る。羨道部は、左右両側壁とも基底石は長さ0.8～1.5m大の大きさの石材二石で構成されている。二段目は長さ0.6～1.0m前後の石材二～三個で構成され、三段目は天井までの高さ0.5～0.6mの間を幅0.4m前後の石材で詰めている。玄門部は、高さ1.1～1.2m、幅0.5mの立柱石を両側壁に用いている。

玄室は奥壁に幅1.6m、高さ1.4mの石材一石を用い、天井までの間を幅0.4～0.6m大の石材で詰めている。

側壁は左右両側壁とも、基底石二石で、その上に二～三段の石材が積まれている。右側壁は、基底石二石から成り、大きさは、奥から長さ1.6m、高さ1.15m、長さ1.7m、高さ0.6mである。二段目は長さ0.7～1.0mの石材を用いている。三段目は、長さ1.3mの石材二石と長さ0.8mの石材一石から成っており、それより上の段は、天井までの0.3mの間を幅0.4mの石で詰めている。三段目は、長さ0.8～0.9m、幅0.3mの石材二石から成っている。四段目は、長さ0.35～1.1m、幅0.2m前後の石材四石で構成されている。

石材の持ち送りは、奥壁部分では若干認められる程度で、ほぼ垂直に巨石を積み上げて構築している。本石室の石材の調整は、壁面を平滑に整っており、特徴の一つといえる。

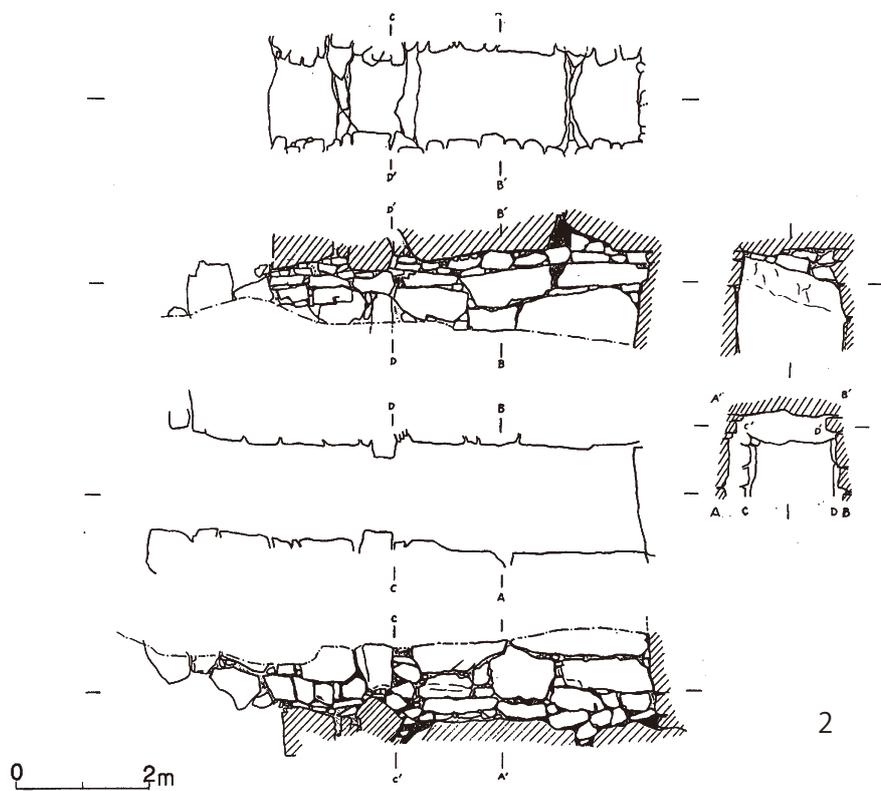
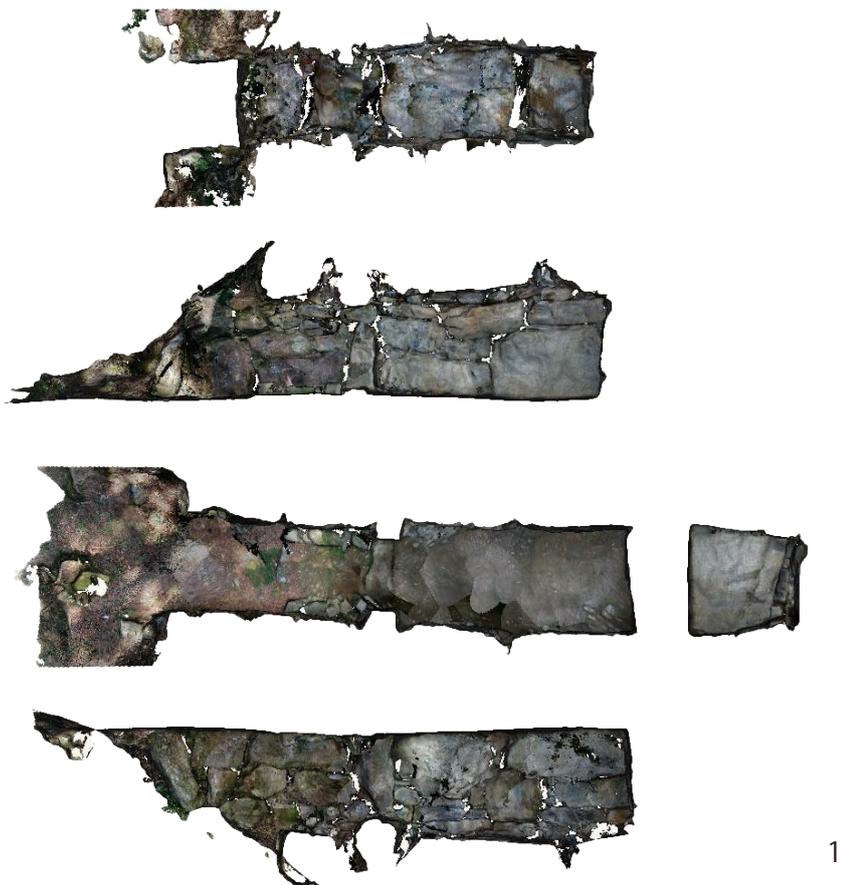


図14 榎木駄場古墳石室 計測データ及び実測図 (S=1:100)